

論説文講評

岡島成行

論説部門では学習院女子中学の林佑里子さんの「富士山クリーンツアー」が優秀賞に選ばれました。自分では環境問題のことが分かっているつもりだったけれど、実際に富士山に行き、ゴミ拾いをしたところ、考えが大きく変わって、まず自分が小さなことでも動くことが必要だと自覚した、という話です。林さんが指摘したことは環境教育で最も大事なことです。環境問題の解決、改善のためには、頭だけで分かっているつもりが最も妨げになります。知識として理解していても、深い理解には至らず、表面的なことで終わってしまうことが多いのです。実際に行動して初めて知識の意味がわかります。環境問題では知識とともに行動、体験が必要なのです。そして林さんは、ゴミ拾いをしてスターになろう、と呼びかけます。地球のためにごみを拾うことは実に立派なことだ。それでみんなに褒められたり、憧れの対象になればもっといい。だからごみのスターになろう、そして環境を守るために頑張ろう、というのです。文章もしっかりしており、構成も中学生離れしたうまさでした。ただ、論説というよりは紀行文に近い文章でしたので、論説と認められるか議論が分かれましたが、論説文の中に紀行文も入っている、という選考委員の判断のもとに優秀賞に選ばれました。

残念ながら優秀賞、奨励賞には論説部門からは選ばれませんでした。物語部門の応募が多く、優秀作がひしめいていましたので、押されてしまったのかもしれませんが。しかし最終選考にまでは4人の論説文が残りました。学習院女子中学の山口眞結子さんの「今、私達にできること」、同じく学習院・鈴木悠莉子さんの「地球とともに生きるために」、宇治市立三室戸小学校・森本綾さんの「地球上に飢餓があるうちは本当の平和でない」、開明高校・廣野翔一さんの「世界の中の自分」の4作品です。

いずれも力作でした。山口さんは地道な努力が地球を救うという正論を書ききることができました。鈴木さんも素直な気持ちがよく表現できていました。森本さんは小学生なのに難しい課題に取り組みました。実は温暖化問題で最も難しいのは豊かな国と貧しい国とのバランスをどのようにするか、ということです。小学生らしい、はきはきした文章で書いてくれました。廣野君は自分の経験を中心にこれからの市民のあり方を書きました。狙いも文章もよかったですのですが、高校生にしてはやや視野が狭く感じました。自分の経験からスタートするのは良いのですが、そこから論を大きく広げて行ってほしかったです。

今年は論説文の応募は少なく、やや残念な気がしました。来年はもっと多くの応募があることを期待します。